

今週の為替相場見通し(2023年9月4日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		144.44 ~ 147.37	146.27	144.00 ~ 149.00
ユーロ	(ドル)		1.0772 ~ 1.0945	1.0773	1.0600 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		157.06 ~ 159.76	157.58	156.00 ~ 159.00
英ポンド	(ドル)		1.2563 ~ 1.2745	1.2590	1.2400 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	183.54 ~ 186.07	184.10	182.00 ~ 187.00
豪ドル	(ドル)		0.6401 ~ 0.6522	0.6450	0.6400 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	93.75 ~ 95.06	94.36	93.50 ~ 95.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1)今週の予想レンジ: 144.00 ~ 149.00 円

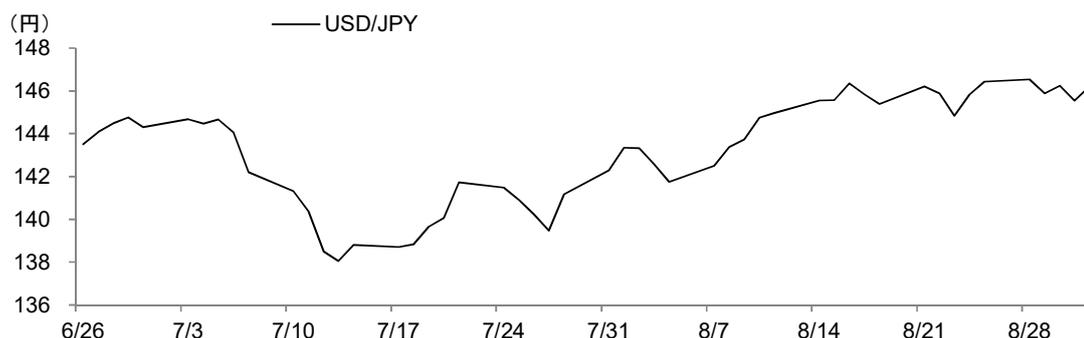
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は年初来高値を更新した後、失速した。週初28日は146.54円で東京時間オープン。週後半に重要指標を控える中、大きくは動きづらかったが、米株が小動きながら続伸、米債利回りも小幅に上昇すると、ドル/円も底堅い展開で146.75円まで上値を伸ばす。29日は、東京時間は146円台半ばで小動きだったが、欧州時間に入ると大台の147円に乗せた。北米時間では月末フローと思われるドル買いに週高値である147.37円を示現。ただ、その後は軟調な米経済指標を背景にドル全面安となり、145.70円割れまで急落した。30日は安値では拾われる動きが出たことに加え、欧州時間に米金利が上昇すると146円台半ばまで戻りを見せる。ただ、この日も弱い米経済指標に再度145円台半ばまで下落。31日は中国指標や米新規失業保申請件数をこなしながら146円を挟んでの展開だったが、株安にドル/円も連れ安となった。9月1日は注目されていた米8月雇用統計にて非農業部門雇用者数が事前予想を上回ったものの、平均時給が低下し、失業率が前月より悪化している点が懸念され、144.44円の週間安値まで急落。ただ、米金融政策のシナリオを変えるほど弱い内容ではないとの見方が広がったことや、クリーブランド地区連銀総裁が労働市場とインフレに対して強気な発言をし、米債利回りが上昇していたことも相まって、146円台へ上乗せ。146.27円で金曜日NY市場クローズとなった。

今週のドル/円は高値圏での推移を予想。今週は4日(月)が米国休場であり、実質的に今週のスタートは5日(火)からとなる。ただ、従前より相場の屋台骨となっている、日米金融政策格差やそれに伴ったキャリートレードに大きな変化が見込まれない中では、8月の流れが続き、じわじわと円安になるシナリオを想定したい。イーールドカーブ・コントロール(YCC)は実体的に骨抜きとされ、先般は田村日銀審議委員のマイナス金利解除示唆発言が耳目を集めたが、ドル/円のトレンドを変えるには至っていない。日本発の円買いがなければ、「相場テーマ不在の中、円安継続」となる。一方で、FRBの利上げは既に市場に織り込まれていることを前提とすれば、年初来高値を大きく突き抜けていくような上昇も期待しづらく、一辺倒な上昇というよりは、下値が切り上がって行くようなイメージで見ている。また本邦当局の目線でも時間を伴った円安であれば「過度な変動」とはならず、介入警戒感も限定的となる。リスクシナリオは人民元高である。これまでは元安がトレンドであったが、中国当局がここもと元高誘導にシフトしているに見える。人民元が対ドルで本格的に転換するのであれば、これまでに蓄積されたアジア通貨の売り持ちポジションの解消が誘発されるかたちでアジア通貨買い・ドル売り・円買いに傾倒するシナリオも想定される。逆説的には現時点において円買いのシナリオは元買いにつれられる程度しか想定してない。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き: 安値 144.44 円 高値 147.37 円 終値 146.27 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0900 156.00 ~ 159.00 円

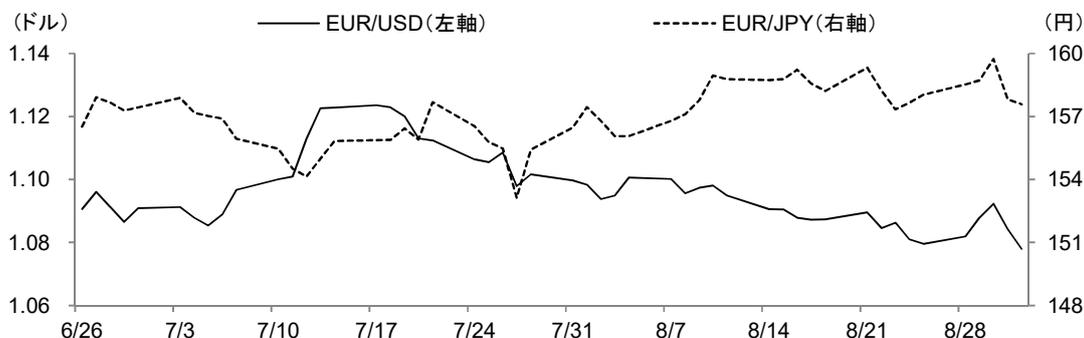
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、米金利低下を受け上昇も、週後半にかけてユーロ圏の景気失速が懸念される中、反落した。週初28日、1.0797でオープンしたユーロ/ドルは、ホルツマン・オーストリア中銀総裁のタカ派な発言が下支えとなる中、1.08台前半でじり高推移した。29日、ユーロ/ドルは、独9月GfK消費者信頼感の弱い結果が嫌気され1.0782に下落も、米経済指標の軟調な結果を受け米金利が低下する流れにつれ、1.08台後半に反転上昇した。30日、ユーロ/ドルは、欧州株式の底堅い推移が下支えとなる中、米GDP統計の弱い結果を受けた米金利低下を背景に、一時週高値となる1.0945に続伸した。31日、ユーロ/ドルはシュナーベル・ECB専務理事が弱い景気認識を示したことを受け独金利が低下する流れに合わせ1.08台半ばに下落した。1日、ユーロ/ドルは、ビルロワドガロー・仏中銀総裁による「金利引き下げを想定し得る地点にはまだ程遠い」との発言や欧州株高を背景に上昇も、勢いは続かず。米8月雇用統計にて失業率上昇や賃金鈍化が明らかになると米労働市場の逼迫緩和が意識され米金利低下に伴いユーロ/ドル一時も1.0882まで上昇。続いて発表された米8月ISM製造業景気指数の強い結果に米金利上昇・ドル買いが進むと、週安値となる1.0772まで下げ幅を拡大。結局、1.0773で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想。先週公表された7月ECB政策理事会の議事要旨では、9月会合での利上げを支持するといった議論だけでなく、9月のECBスタッフ見通し次第では9月追加利上げに否定的との主張も出ていたことが分かった。タカ派と目されるシュナーベル・ECB専務理事も慎重姿勢を示したことで9月利上げ見送りの可能性が高まっている状況である。とはいえ、ユーロ圏8月消費者物価指数(HICP、速報)は総合ベースでの鈍化が一服し、コア指数も未だ高止まりしていることから、容易なハト派転換は考えにくい。引き続き、9月14日(木)のECB政策理事会に向けて、5日(火)発表のユーロ圏7月生産者物価指数や6日(水)発表のユーロ圏7月小売売上高の結果を見極める必要がある。ユーロ圏経済の景気減速懸念が高まっている中、軟調な結果となれば利上げの織込みが剥落し、ユーロが売り込まれやすいとみている。ユーロのロングポジションも相応に積み上がっており、上値追いよりもポジション調整によるユーロ売りが加速する展開に警戒すべきだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.0772 高値 1.0945 終値 1.0773
(対円) 安値 157.06 高値 159.76 終値 157.58



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2800 182.00 ~ 187.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は上下に大きく動く展開となったが、終盤には対ドルでの下落が鮮明となった。米国の経済指標は強弱まちまちだったが、総じて米国の景気・雇用情勢は欧州・英国に比べて底堅いという見方に結実したように見受けられる。29日に公表された米7月JOLT求人件数で求人減少が確認されたことや、31日に公表された米8月ADP雇用統計が市場予想を下回ったこともあり、対ドルで反発した。31日にはBOEのチーフエコノミスト、ヒュー・ピル氏が訪問先の南アフリカ・ケープタウンで講演し、英国の金利について急上昇して急落するよりも、「テーブル・マウンテン」型が望ましいという発言が注目を集めた。ピル氏の発言はケープタウンの観光名所にちなんだものであり、文字通り、頂上が平らでまるでテーブルのような景観を呈していることで知られる。ピル氏の比喩表現は、BOEはこれ以上の大幅利上げは望んでいないこと、一方で長期間、高い政策金利の水準を維持すること、の2つを明確に示すものだ。31日のポンド相場は英短期金利の低下を反映する形で下落。市場が織り込むターミナルレートは5.75%を割り込み、5.69%へと低下した。現在の政策金利は5.25%であり、市場はBOEの利上げ打ち止めが近いという見方に傾きつつある。9月1日は再び米景気・雇用指標が主導する相場展開となった。米8月雇用統計は就業者数は18.7万人増加と市場予想の17万人増加を上回ったものの、7月分は18.7万人の増加から15.7万人へと3万人の大幅下方修正となり、失業率は7月の3.5%から3.8%に上昇、平均時給も7月の前月比+0.4%から同+0.2%に減速した。このように解釈の難しい結果を受けて米金利・ドルは上下する展開となったが、その後に発表された米8月ISM製造業景気指数が市場予想を上回ったこともあり、ドルは一転して上昇基調を強めている。対円ではほぼ横ばい。1週間を通じてドルを中心に他通貨が振り回される展開だったと言えよう。

今週1週間も、英ポンドは上値の重い展開となりそうだ。8月23日に公表された8月分の欧州・英国のサービス業PMI(速報)の決定的な悪化はインパクトが大きい。「利上げにも関わらず消費を中心に景気は底堅い」という認識から、「金融引き締めによって製造業だけでなくサービス業にもブレーキがかかっている」という認識へ、市場の見方を大きくシフトさせた公算が大きい。インフレ率の高止まりを考慮すれば、ECBもBOEもまだ利上げを継続すると見られるものの、9月会合での追加利上げの可能性はFRBにも残っており、欧州中銀の追加利上げ観測をもってユーロや英ポンドを買うのは難しい。こうした見方を覆すだけのインパクトのある統計は来週には見当たらない。なお、今週は米国が月曜日に祝日であり静かな滑り出しとなりそうだ。英国の経済指標は二線級のもののしか発表されないが、9月7日(木)公表の英求人雇用連盟(REC)の調査結果はやや注目だ。BOEチーフエコノミストのピル氏は8月31日の講演のなかで、RECが公表する英企業が新たに採用する従業員の賃金の上昇率の伸びが鈍化していることを、賃金上昇圧力が和らいでいることを示唆するものとして挙げていた。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.2563 高値 1.2745 終値 1.2590
(対円) 安値 183.54 高値 186.07 終値 184.10



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6550 93.50 ~ 95.00 円

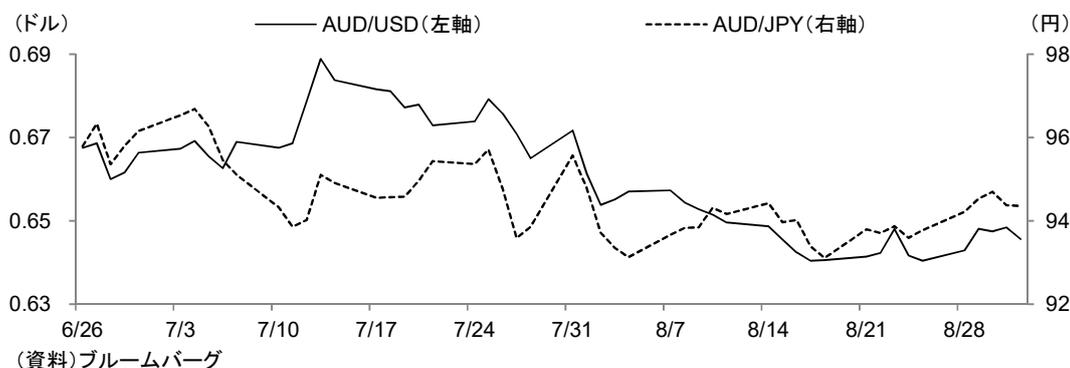
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは総じて小動きながらも0.64台にて上昇した。週初28日の豪ドルは0.6416でスタートし、ジャクソンホールを消化しながら0.64台前半のナローレンジで終始振幅した。豪7月小売売上高は女子W杯とスクールホリデーを背景に衣服や持ち帰り食品サービスの需要が押し上げられ前月比+0.5%増(市場予想:前月比+0.3%)となると、豪ドルは0.6440まで一時上昇したが、買いが一巡すると0.6403まで戻しNY引けは0.6430となった。29日の豪ドルは0.6428でスタート後、豪地場コーポレートの豪ドル買いで押し上げられるも、比較的大きなオプションピンが0.6410にあったためガンマ勢による売りの攻防により0.64半ばで頭を押さえられた。ブロックRBA副総裁(次期総裁)の講演ではインフレが依然高すぎるとしてインフレとの闘いが最優先課題になるとした。また「追加利上げの是非は月ごとに当面判断していく」とした。NY時間では米7月JOLT求人件数が2年ぶり低水準となった事などを背景に、豪ドルが0.64台後半へと上昇。NY引けは0.6480となった。30日の豪ドルは豪7月消費者物価指数インディケーターが前年同月比+4.9%と予想以上にインフレが鈍化し、来週のRBA会合での利上げ見込みがほぼなくなり、0.6473から0.6450まで下落。一巡後は0.64台後半で振幅した。NY時間では米景気減速を示唆する経済データが相次ぎ、FOMCによる利上げが終わりに近づいているとの見方が強まり、豪ドルは一時0.6522まで上昇した。NY引けは0.6476。月末31日の豪ドルは0.6479でスタート後、豪4~6月期民間設備投資が予想を大きく上回り、前回値も上方修正された事で上方向に弾みがつき、中国8月製造業PMIは再び50を下回ったものの予想比上振れ、中国8月コンポジットPMIも前回値を上回り、中国経済回復の僅かな兆しが見えた事で一時0.65付近まで上昇。その後は0.64台後半で振幅し、NY時間は強弱入り混じる経済データで小幅にもみ合いとなった。週末1日の豪ドルは0.64台後半で推移したのち、中国人民銀行が外貨預金準備率の引き下げ(6%→4%)を発表すると、0.6500まで急伸するも再び0.64台後半まで押し戻された。NY時間序盤には、米8月雇用統計の軟化から一時ドル売りが優勢となり0.65台前半まで上昇する場面も見られたが、続いて発表された米指標が予想を上回る結果となりドル買いから豪ドルも0.64台半ばまで反落してクローズした。

今週の豪ドルは上値重い推移を予想する。豪米の金利差と中国の景気悪化懸念を背景に豪ドルは伸び悩むだろう。今週は5日(火)にRBA金融政策委員会が予定されており、政策金利を4.1%に据え置く市場予想となっている。米国も次回FOMCでの金利据え置きが予想されるが、米国の政策金利の方がオーストラリアよりも高く、また米国の金利は今後高いまま据え置きしないしは必要に応じて引き上げが予想されるため、対ドルにおける豪ドルの上昇はなかなか難しいだろう。また、中国の景気悪化に関するニュースも豪ドルの上値を重くしており、引き続き警戒が必要と考えている。また、今週は、5日(火)にRBA金融政策委員会、6日(水)に豪4~6月期GDPの発表が予定されている。前述の通り、RBAでは金利据え置きが予想されており、予想通りの結果となれば、豪ドルは現行の水準にて小動きとなる。また、GDPは前期比にて上昇、前年比にて下落が予想されており、まちまちの結果となればもみ合いとなり値幅の出づらい相場展開が継続するだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き: (対ドル) 安値 0.6401 高値 0.6522 終値 0.6450
(対円) 安値 93.75 高値 95.06 終値 94.36



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。